

蘇儿故郷ノ風景

- 富山県山岳地区奥都におけるヴァナキュラー・オブジェクトの提案 -

01 背景

失われる地域固有の風景



近年、高度な文明の発展によって建築技術は大きく進化した。あらゆる地域において機能性の高い画一的な建築を建てることのできるようになった反面、多くの住宅地や都市では建築の均質化が進行し、地域固有の風景は失われてきている。

希薄化する地域の風景と人々のふるまい



地域特有の風景が失われてきている一方で、過去の歴史や文化を尊重し地域性ある風景を持つ可視性を保存しようとする動きが見受けられる。しかしこのようなまちに押し寄せた人混みや、建物の老朽化・用途の変化によって改修された「抜け殻のような建築」の風景にはいささか違和感を感じる。

このように地域の風景に対して地域住人や訪れる人々のふるまいは希薄になってきていると考え、改めて地域性ある風景を維持し共存する方法を検討し、その意義を提示する必要があると考える。



02 仮説

“地域性ある風景”を持つまちが有する特徴の調査

はじめに“地域性ある風景”がどのように創出されているのか、その構成やありようについて仮説をたてるための調査を行う。重要伝統的建造物群保存地区選定基準の「(3) 伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの」によって選定されたまちを“地域性ある風景”持つまちとして捉え、その風景について、線面化、着色、特徴の記述を通してまちが有する個性の可視化を図る。

調査手法

調査カードの作成

16. 台山村長町
重要伝統的建造物群保存地区選定基準の「(3) 伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの」によって選定されたまちを“地域性ある風景”持つまちとして捉え、その風景について、線面化、着色、特徴の記述を通してまちが有する個性の可視化を図る。

風景を線画で表す

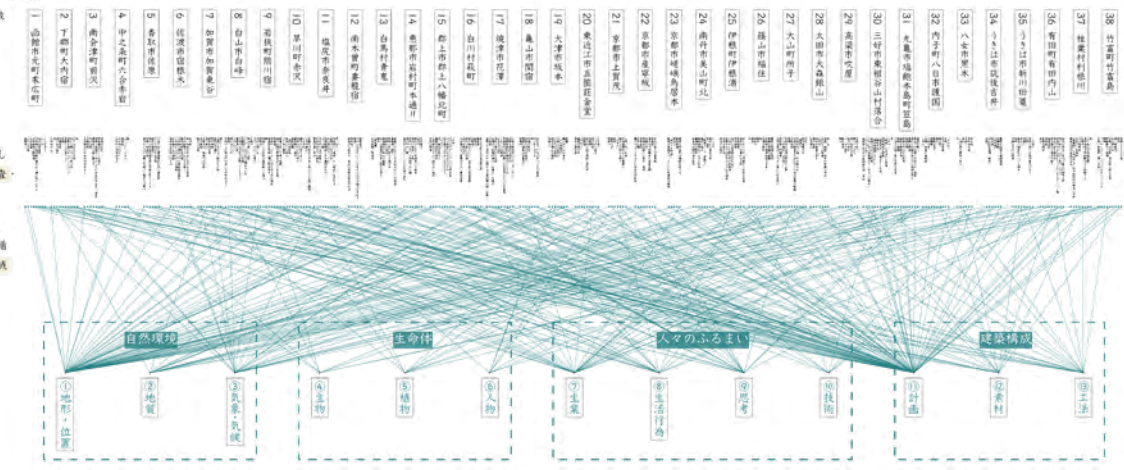
重要伝統的建造物群保存地区選定基準
(1) 伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの
(2) 伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの
(3) 伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの

特徴を着色し記述

地域性ある風景を持つまちの特徴の分類

全38のまちの調査から、地域性ある風景を持つ街が有する特徴を羅列し分類分けを行うと、自然環境 ①地形・位置、②地質、③気象・気候 生命体 ④生物、⑤植物、⑥人物 人々のふるまい ⑦産業、⑧生活行為、⑨思考、⑩技術 建築構成 ⑪計画、⑫素材、⑬工法 といった4つ分類と13個の特徴を読み取ることができた。調査から得られたこれらの特徴は地域性ある風景を持つ特徴として分析することができ、地域性を読み解く上での視点として調査・提案への手がかりとなる。

また“地域性ある風景”を持つまちから読み解いた自然環境は、人々がその地域で暮らし始める以前から、時の流れや自然の循環によって形成されていた。その場所がはじめに有していた地域の自然環境であると考えられる。本研究ではこのような自然環境を“始原の環境”と定義する。



地域性ある風景を持つまちにおける暮らし

“地域性ある風景”を持つまちでは、人々は始原の環境を肯定的に捉え、その性質を最大限駆使した豊かな暮らしが行われていると考えられる。またその暮らしと呼応した構築物がまちには現れ、地域性が可視化されていると考えられる。

本研究ではこのようにしてまちに現れてきた構築物を“ヴァナキュラー・オブジェクト”と呼び扱う。

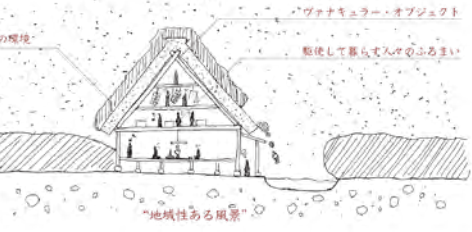


白川村長町・合掌造り民家
豪雪に對して積雪で外に出られない期間においても活用し、養蚕業を行うため、積雪量を最小限にするための急勾配の屋根にしたり、屋根裏に大空間を設けたりすることで合掌造りや養蚕の開口部などが現れている。



“地域性ある風景”のありよう

“地域性ある風景”を創出することは「地域の始原の環境に基づいた、人々の豊かな暮らしを考え、有効に利用されるヴァナキュラー・オブジェクトを構築すること」であり、始原の環境、それを駆使して暮らし人々の暮らしを豊かに、ヴァナキュラー・オブジェクト、それらが全て現れている様子が“地域性ある風景”としての、あるべき姿であると考えた。



03 対象地域

地域性ある風景がわずかに残るまち 故郷・富山県山部
 対象とする地域は私の故郷である富山県山部に位置する山部地区と山部です。この地域では、庄川扇状地の扇端部に属することで、特にカイニョと養殖池の二つのヴァナキュラー・オブジェクトに着目することができます。



矢部地域が有する特出した二つのヴァナキュラー・オブジェクト
 庄川扇状地の扇端部は砺波平野の散居村として有名な地域であり、対象地域においてもこの性質は見受けられる。散居村とは農業を効率よく行いたため平野一帯に散在する集落形態となったが、故に冬風や日差しを受けやすく近くに深山がなかった人々は「カイニョ」と呼ばれる屋敷林を植樹することで気温を調節や冬風の防風、生活資材等を得たりしていた。住人はカイニョを生活のインフラとして持つ暮らしが行われていた。
 また矢部地域一帯は庄川扇状地の扇端部に属することで、庄川の地下水や湧水を利用した養殖業が農業の副業として発展し、養殖池を持つ家屋がまちはにみられる。



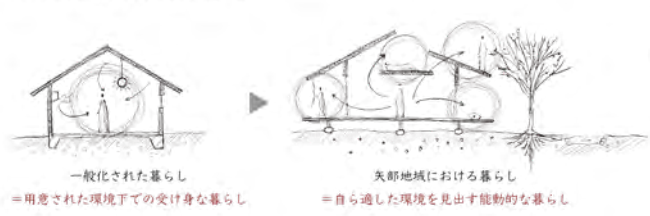
05 暮らしの提案

自然環境の変化を享受したふるまいのある暮らし

地域の暮らしにおける出来事を情景化していくと、玄関から入りこむ風景を感じながら、廊下で寝る父の姿や、屋根に登って柿をとる祖父の姿など、自然環境の変化に伴いふるまっていた様子が多く記憶に残っていることに気付かされる。これらの出来事たちは多様に変化する自然環境の中で、人々はその時々に適した環境を見い出して、自ら身体的に適した豊かな環境を得ているのではない。



広い平野に暮らしの場を散居させ、養殖池を持ち豊かなカイニョ育みながら暮らしすることは、多様な自然環境の変化を過度に調整しすぎず、その環境を享受して振る舞うことができる暮らし方であると考える。それこそが地域で最も生き生きとした始原の環境を継承した暮らし方であると考える。そこで多様な自然環境の変化を享受し、人々が能動的にふるまうことができる暮らしと、ヴァナキュラー・オブジェクトを有し、カイニョと養殖池が共存できる建築を提案する。



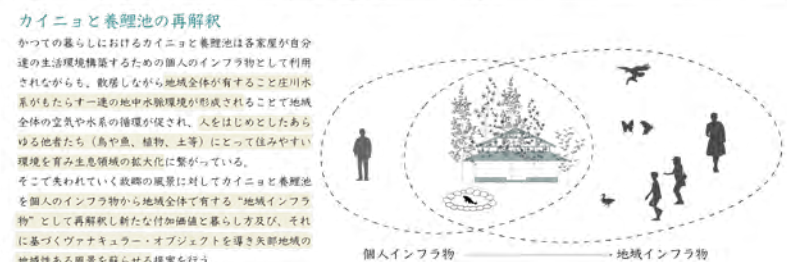
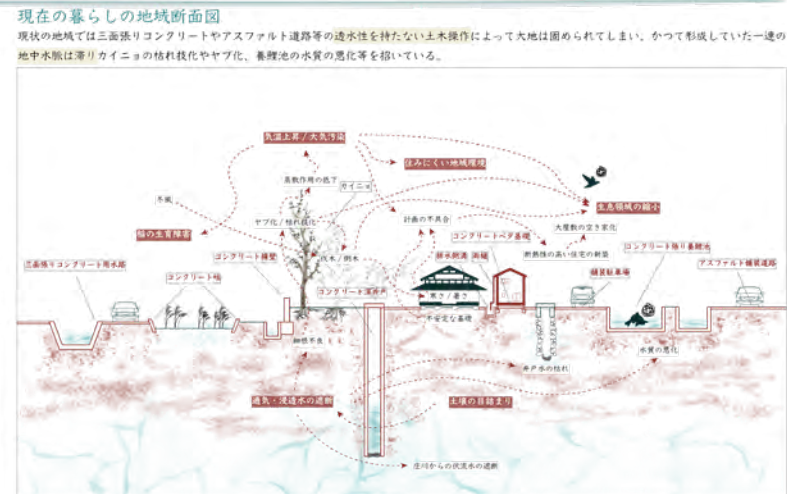
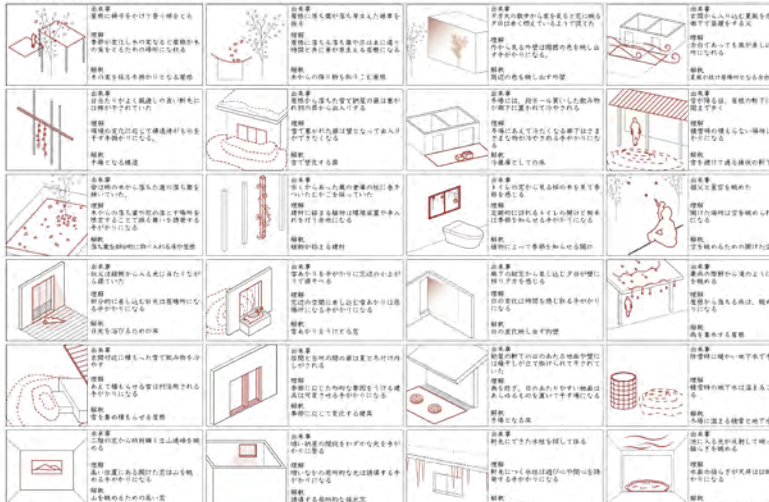
04 地域の現状



06 設計手法

変化を享受したふるまいにおける構成要素の再解釈

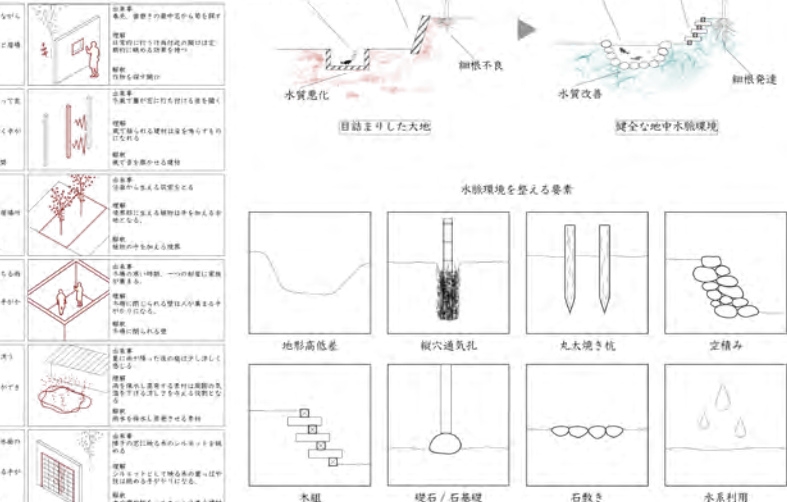
矢部地域の暮らしのなかで得られた自然環境の変化を享受したふるまいたる些細な出来事たちに含まれる暮らしの構成物たちは、それが単なる屋根であっても例え柿の実に近づけば杖に柿を揺るための手がかりになる屋根としての役割を果たしている。これは地域において「木の実を揺る手がかりとなる」屋根といったふるまいを誘発する地域の言語を持った構成要素として解釈することができると。このようにして得られた出来事を理解し解釈を加えた構成要素をヴァナキュラー・オブジェクトを構築するための手がかりとする事で地域を副次的に得られていたふるまいの再構成を目指す。



06 設計手法

変化を享受したふるまいにおける構成要素の再解釈

矢部地域の暮らしのなかで得られた自然環境の変化を享受したふるまいたる些細な出来事たちに含まれる暮らしの構成物たちは、それが単なる屋根であっても例え柿の実に近づけば杖に柿を揺るための手がかりになる屋根としての役割を果たしている。これは地域において「木の実を揺る手がかりとなる」屋根といったふるまいを誘発する地域の言語を持った構成要素として解釈することができると。このようにして得られた出来事を理解し解釈を加えた構成要素をヴァナキュラー・オブジェクトを構築するための手がかりとする事で地域を副次的に得られていたふるまいの再構成を目指す。



07 プログラム

段階的な地域定住を促す建築と新たな住居

矢部地域や牧野村地域では豊かな自然環境を有することで住まいとしての需要は高く、移住してくる人や観光客を惹きつける家族は多い。そのために地域に住宅が建てられるが、現代一般化された宅地開発やモデル化された住宅などカインヨと兼業地を持たない住宅が建設されることで地域の風量は普通化してきている。

カインヨと兼業地を地域的に所有していくため、訪れたヨソモノが地域住人へと昇格し新たな暮らしが行える地域住宅と、段階的な地域定住を促す3つの建築を提案する。



地域課題の解消と新たな地域ネットワーク

ヨソモノを移住者として昇格していくプロセスの中で、同時に既存地域が抱える課題を解消することを目指す。提案する4つの建築たちは、互いに連携し合い新たな地域のネットワークを構築し、カインヨと兼業地が地域インフラとして次世代へと受け継がれていくことを期待する。



08 設計提案

Site A 地域に「触れる」四季を体験するまちの旅館

兼業産業の地産地消を促し、発展・継承を目的に来訪者を迎え入れ、はじめに地域に触れることができる施設。自然環境の変化である季節の移ろいをコンセプトにすることで複数の地域の姿の体験を内包し、来訪者の多利用を測り、地域発展に繋がることを期待している。



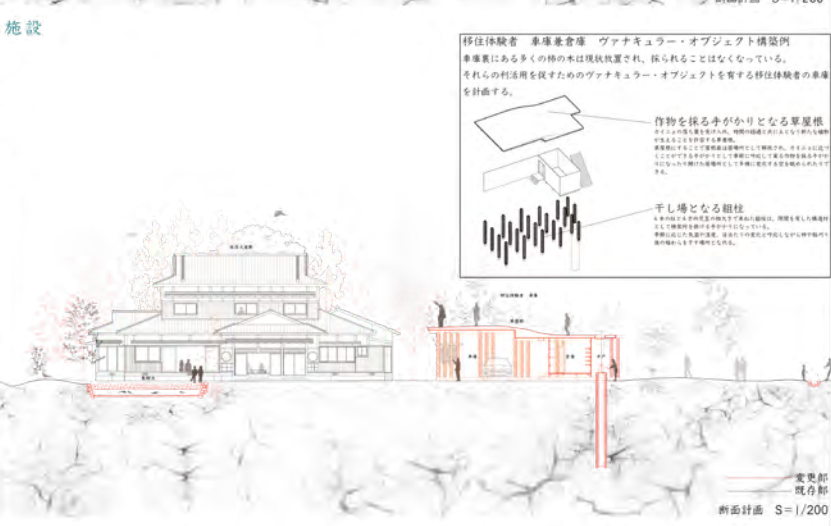
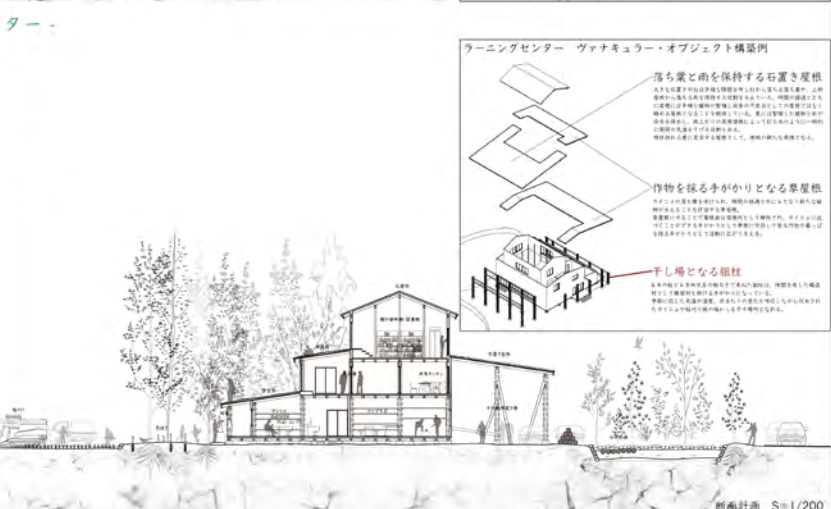
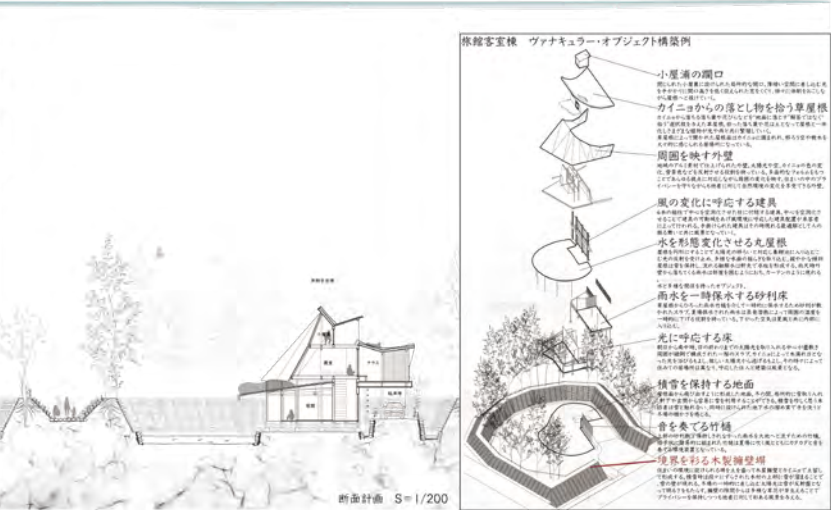
Site B 地域を「知る」矢部の学びの拠点-ラーニングセンター-

他地域への情報発信や学校と連携し地域に新たな雇用者を獲得したり、伐木されたカインヨの活用を行ったりすることができる施設。



Site C 地域を「経験する」大屋敷を改修した地域体験滞在施設

まさに数える大屋敷はライフスタイルの変化や高齢化から空き家化が懸念されている。かつての生活から構成された広い敷地や暮らしの場を生かし移住希望者が大屋敷住人のもと一時的に地域の暮らしを体験できる施設。





段階的な地域経験をへて、地域で働きながら暮らすことを決意した夫婦が住まう住宅。既存の大屋敷所有者が持つ田んぼを敷地として提供してもらい、互いに連携し合いながら田んぼの管理をしていく。農業従事者や通りかかるとしてのサードプレイスとしての役割を担いながら、地域での暮らしを営んでいく。



変化を享受したふるまいを導くヴァナキュラー・オブジェクト

山を眺められる高窓
 既存の大屋敷の敷地に設置された。その階高は約7.5mと通常の2倍近くあり、その高さを活かして二重窓を採用する。山を眺められる高窓は、その高さを活かして二重窓を採用する。

陽を採る高窓
 2階の陽台で自然に陽を採りながら過ごすことができる。高窓は、その高さを活かして二重窓を採用する。

雪あかりを取り込む出窓
 敷地の南側の田んぼに面した出窓は冬の風景を取り込む。雪あかりを取り込む出窓は、その高さを活かして二重窓を採用する。

落ち葉と雨を保持する石置き屋根
 大きな屋根の下には落ち葉や雨を溜め、その水を再利用することができる。落ち葉と雨を保持する石置き屋根は、その高さを活かして二重窓を採用する。

季節を知らせる窓
 窓は季節の変化を知らせる。季節を知らせる窓は、その高さを活かして二重窓を採用する。

あいの風を廊下に取り込む地窓
 廊下の地窓はあいの風を取り込む。あいの風を廊下に取り込む地窓は、その高さを活かして二重窓を採用する。

季節に呼応する建具
 建具は季節の変化に呼応する。季節に呼応する建具は、その高さを活かして二重窓を採用する。

水を形態変化させる屋根
 屋根は水を形態変化させる。水を形態変化させる屋根は、その高さを活かして二重窓を採用する。

日光を浴びる縁側
 縁側は日光を浴びる。日光を浴びる縁側は、その高さを活かして二重窓を採用する。

音を奏でる竹植
 竹植は音を奏でる。音を奏でる竹植は、その高さを活かして二重窓を採用する。

雪を集める大屋根
 大屋根は雪を集める。雪を集める大屋根は、その高さを活かして二重窓を採用する。

夏風を浴びる掃き出し窓付き階段
 階段は夏風を浴びる。夏風を浴びる掃き出し窓付き階段は、その高さを活かして二重窓を採用する。

周囲色の変化を映し出す外壁
 外壁は周囲色の変化を映し出す。周囲色の変化を映し出す外壁は、その高さを活かして二重窓を採用する。

植物を採る手がかりとなる草屋根
 草屋根は植物を採る手がかりとなる。植物を採る手がかりとなる草屋根は、その高さを活かして二重窓を採用する。

干し場となる銀柱
 銀柱は干し場となる。干し場となる銀柱は、その高さを活かして二重窓を採用する。

作物を採る手がかりとなる草屋根
 草屋根は作物を採る手がかりとなる。作物を採る手がかりとなる草屋根は、その高さを活かして二重窓を採用する。

季節で色移りする屋根
 屋根は季節で色移りする。季節で色移りする屋根は、その高さを活かして二重窓を採用する。

干し場となる床
 床は干し場となる。干し場となる床は、その高さを活かして二重窓を採用する。

植物で彩られる境界
 境界は植物で彩られる。植物で彩られる境界は、その高さを活かして二重窓を採用する。



提案するヴァナキュラー・オブジェクトたちの集積によって、単体として完結する暮らしではなく、建築内、外全体に多様な「地域」の言語を持った「居場所」が構築され、異なる暮らし方とともに地域性ある風景が現れます。

断面図 S-1/100

09 結

提案する建築たちが普及することで、地域全体で一連の地中水脈を有する環境が現れます。その環境下でカイニョと兼業地が育まれ、また提案するヴァナキュラー・オブジェクトがまちに普及し、地域全体で多様な居場所が現れる。人々のふるまいと共に地域性ある風景が蘇ります。

かつての人々の暮らしは限定された環境下で豊かに生きようとする情が「地域性ある風景」として現れます。それと同様に変化を享受した自ら適した居場所を構築することは、一見すると不便な暮らしかもしれませんが、限定された環境化であるからこそ、適した環境を構築した時に暮らしの豊かさを得て、それが魅力ある風景として現れます。現代において一律な環境下を求める私たちにとって忘れられてきている、居場所の構築及び「地域に暮らす」ことを再考した提案です。

